



理事会だより (11・11)

- 一、池田会長より、大会として一年九ヶ月振りに文化の日俳句大会が滞りなく実施されたことにつき事業部はじめ各位への御礼と、神静民報、タウンニュースに大会の様子が報道されたことの報告がなされた。
- 二、文化の日俳句大会の総括が事業部より、会計報告が会計部より。当日の時間短縮につき意見が出され今後の参考とすることに。
- 三、梅まつり俳句大会の投句用紙配布、大会当日の開会を三十分繰り上げ13時に変更。
- 四、立春句会の短冊を配布、詳細は本号3頁
- 五、桜まつり俳句大会の兼題、投句締切等は12月理事会にて決定することに。
- 六、年間ベスト1句を広報部より依頼。
- 七、「俳句の岸辺」に感想を頂いた澤田陽子様に合同句集十二集を差し上げることになった。

「俳句おだわら」10句抄 (651号より)

新井たか志 抄出

みずからは余命測れず緋のキャンナ いちめん咲くが本領彼岸花 残葉を数へてゐたる夜の秋 よみがへる木の香草の春秋はじめ 草句ひ土句ひ立つ秋暑かな 葛の葉の制御不能に垂れにけり 柿根性敬老の日に思いたる ホスピスの友に文書く秋の夜 笑み栗や縄文の宙拡がりぬ 夏深む最中の餡のうす緑	日傘から喜びごとのあふれだす したたかや御神木へと藪からし 耳飾り片方無くし夏終る 雲形定規飽かず眺むる無月かな 蟬声の盛りの底に早雲寺 朝顔や鏡と話す美容室 爽涼と山を越え行く送電線 鉛筆に叱られている秋灯下 秋の病室カーテンの林に迷子 瘡蓋や赤とんぼうを糊付けに	加藤 健治 寶子山京子 伊藤はる子 陌間みどり 神山つとむ 村場 十五 岩本ひさみ 岡本 史郎 佐々木重満 杉山あけみ	寶子山京子 抄出 市川めぐみ 二見 和江 山崎美知子 庄司 下載 田下 昌人 近藤 絢子 中村 裕子 木村 和彦 小林永以子 小島ノブヨシ
---	--	--	---

令和三年度文化の日俳句大会

小田原市民文化祭が中止になったので、当協会として単独の開催となった。兼題投句は一七四名、二七八組と大幅に過去の記録を更新し、大会当日は新型コロナウイルスの緊急事態宣言等が解除され、七十名の参加を得て一年九ヶ月振りの大会を成功裡に終えた。

兼題入賞作品（高点順）

小田原俳句協会会長賞

鴉の贅風のかたちに乾らびをり

大澤 秀子

小田原俳句協会賞

鴉の天跳び箱一段高くする

豊田 幸枝

地球よりこゑのはみ出る鴉日和

近藤 久江

斧研いで今日が始まる鴉日和

山田 凍崖

我もまた忘れ上手や鴉の贅

中村 昌男

爺ちゃんの畝真つ直ぐや鴉日和

田中 幸子

文鎮のほど良き重さ文化の日

内藤ちよみ

植木屋の私服長し鴉の晴

大澤 秀子

バス停に新しき椅子鴉日和

片野 秋子

鴉の声湖底の村を探しおり

岡田 典代

ロボットにまかす掃除や文化の日

中山智津子

隠れ家のような図書館文化の日

須田 聡子

鴉高音負けぬ赤子の泣き力

川本 育子

文化の日古本市の羽箒

豊田 幸枝

地下足袋の小鉤こはしのずれや鴉の朝

久保寺トミ子

切り株のほど良き歪み鴉の天

関根 洋子

人もみな叫びたき世や鴉高音

青木たけを

文化の日急須の蓋に穴一つ

山田 凍崖

真つ青な空軋ませて鴉猛る

山田 凍崖

太陽を大きく描く児文化の日

佐藤 榮一

選者特選賞

小田原俳句協会名誉会長

佃 悦夫特選

急降下とんがっている鴉と我

大石 和子

小田原俳句協会顧問 新井たか志特選

鴉の贅風のかたちに乾らびをり

大澤 秀子

小田原俳句協会会長 池田 忠山特選

新しき鍛帳上がる文化の日

松岡美和子

みなみ俳句協会代表 加藤かほる特選

隠れ家のような図書館文化の日

須田 聡子

山北町俳句協会代表 中山 妙子特選

切り株のほど良き歪み鴉の天

関根 洋子

青梅の会代表 田淵 令子特選

文化の日老いのスマホは五里霧中

荒 理依子

当日題入賞作品（秋季雑誌二句合点高点順）

小田原俳句協会会長賞

木の瘤の慈顔仏顔小鳥来る

（以下二十位まで）

墨糸を弾く棟梁秋高し

小綺麗に生きて行きたし武部の実

それぞれに己が音持ち木の实落つ

秋簾夕日もろとも巻きにけり

風の日は風に成り切る泡立草

手拭に染みる土の香文化の日

寢息ごと赤子抱き受く菊の宮

人去りて花野は無口となりけり

秋夕焼帰心ぼつりと点りけり

窯出しの白磁の壺や暁けの月

少年の両手ほどけば蟋蟀翔ぶ

待つとなく忘るるとなく十三夜

秋燕やみるみる点になる私

吊るされて怒りの色の唐辛子

鶏頭や袋小路に波の音

いてふ散りやまず連弾なりやまず

秋入日バベルの塔の空の下

薄紅葉握る手今もありますか

スケボーの子等の反転いわし雲

清水 吞舟

瀬戸 りん

石黒 和風

大澤 秀子

日高 朝代

新井たか志

中根登美子

八城 湖楊

若村 京子

中村 昌男

碓 百合子

塩崎 琴

山田 照子

畠 梅乃

関根 洋子

鳥海 壮六

池田 忠山

加藤 三眠

中山 妙子

伊藤あつ子

立春句会のお知らせ

日時 令和4年2月4日（金）雨天決行

集合 小田原城天守閣 本丸広場・時計塔前 10時

・短冊（立春・梅に因んだ句。1月までの理事
会または当日に持参下さい）つるし後句会場
にて投句

会場 小田原市民センターUMECO第2会議室

*会場は現在のところ飲食可能ですがなるべく
各自食事を済ませてご参集ください。マスク
着用など感染症防止対策は継続します。

会場利用時間 12時～15時（受付12時～）

会費 五百円（賞品代等）

投句 当日囁目3句を短冊にて（受付にて配布、締

切12時30分）

句会 13時より総互選

*事前申込の必要はありません。お仲間をお誘い
合わせの上現地にご集合下さい。

令和三年年間ベスト一句集案内

一、無所属各位は、広報部あて「ベスト一句集」と

してはがきで送稿して下さい。

一、メ切り 令和4年1月13日（2月号掲載）

一、送稿先 〒250-0042 小田原市荻窪五四九一-一七

小田原俳句協会広報部 村場十五

懐かしさいっぱいの『俳句の岸边』

佐宗 欣二

一冊の本になるほどの沢山の文章を佃さんが協会報に寄稿されていたことに先ず驚いた。

集中、鬼籍に入られた先輩方の名前が何人も出てきて、その方達の俳句を読み、しばし思い出に浸ることが出来た。

開成町で行われた「NHK俳句王国」は、佃さんと鳥海正樹さんが出演されたので観ているが、詳細は覚えていない。佃さんの出句された二句に点が入らず、司会からコメントを求められて「名句ほど点が入らないのを、ますます確信」と答えられたという。謙虚な佃さんの発言を意外に思う一方、作句姿勢を貫かれたことに感心した。

飯泉観音に芭蕉句碑があることは初めて知った。句碑をいつ誰が建立したかは分からず、住職さんが贋作らしいとまで言われたのが、嵐山光三郎の『悪党芭蕉』に多少異同のある句が出て来て句の出典が明らかになったという話も面白い。

「金子兜太と私」を読んで、佃さんが兜太の推薦により現代俳句協会賞選考委員など俳壇の重責を担われたことがよく分かった。兜太と言えば佃さんの現代俳句協会賞受賞祝賀会の会場のトイレで出会い、気軽

に声をかけてくれたのを思い出す。
今の私にとっては、懐かしいことが沢山書かれていて初めて知ることも多い。『俳句の岸边』は読んで楽しかった。

俳句おだわら（11・19メ切り、到着順）

◆鹿火屋（10・22）

久江報

稲ぼつち最終電車の過ぎし闇

足立 和子

ここも又更地色なき風の中

川本 育子

あきつ群れ朝のひかりを散らしをり

高橋 小糸

薔薇散りて一片づつの重みかな

山崎 悦子

桜紅葉陽ざしほのめく朝かな

近藤 久江

◆山北（10・28）

由里子報

コスモスの揺れに癒さる独りかな

和田恵美子

秋風やペランダ越しの手話はずむ

尾崎 幸子

山査子の実よひとつ増す常備菓

中山 妙子

しばらくは迷子愉しむ秋の蝶

尾崎 竹詩

大ジャンプのイルカの飛沫秋うらら

石田加津子

冬隣石工の声のよく通る

竹下由里子

◆零（11・18）

史郎報

身に入むやひと部屋だけの灯かな

野川木一路

落日を惜しんで赤し烏瓜

青木たけを

秋桜や欲望薄れそれなりに

佐藤 正子

薄闇のかすかな鼓動烏瓜

伊藤 道郎

烏瓜シルバーカー引き投票す

川合 昌子

身に入むや妻にも愛犬にも先立たれ

木村 和彦

朝寒し布団ひっぱりもぐりこむ

井上 良子

茶が咲いて安寧の日々来たるかな

中村 裕子

密やかに天空のポスト烏瓜

岡本 史郎

◆みなみ(10・16)

かほる報

菊日和娘の住む町へ歩を延ばし

加藤れい子

烏瓜秘めたる恋の色に出て

村上 龍山

錦秋の諏訪湖の動画着信す

加藤 富江

秋の夜遺言状はまだ未完

豊田 幸枝

秋の夜に駄句を秀句にする努力

市川めぐみ

さつま芋蔓引くたびに声こだま

斎藤 静

隊列の吾子を追ふ目や運動会

加藤 健治

さつまいも昭和の匂いする駅舎

飯田 愛

戸を開ける十月ですと風の声

小瀬村信子

秋の夜の一人の時間終い風呂

加藤かほる

◆春野(10・17)

きよ志報

リハビリの経穴が泣きます菊日和

尾崎 一夫

ねんごろに髪すく月を待ちながら

瀬戸 悠

芭蕉句碑立ちたる古道鷹渡る

秋山 昇

鯛雲役員決める阿弥陀籤

伊藤はる子

御移りに松茸ひとつ賜りぬ

内田知江子

山粧ふらし定まらぬ木々の色

二見 和江

神の留守監視カメラのそこかしこ

長谷川きよ志

◆沈丁(11・6)

寶子山報

帰り花これより先は行きどまり

中野 文子

帰り花吾子にもありし片えくぼ

若村 京子

日溜りは恋の語らひ帰り花

柳澤ミサ子

帰り花我は理財に無頓着

田中 恵一

帯留の色そのままに返り花

河本 純子

いつだって遅刻のあの子帰り花

瀧本 敦子

帰り花母にあやまる事ばかり

勝木 澄子

老木よいかに生くるか返り花

菅野 英余

生きる場所やつと見つけた帰り花

高井 幸子

凜として咲くがいのちの返り花

片野 節子

三度目のワクチン接種返り花

寶子山京子

過ぎてより金木犀の香りまた

忠山報

そぞろ寒しどろもどろの夜想曲

肥後ちさこ

踏みしむるものに音あり秋深し

関戸わよこ

青山 典子

名園のきりりと映ゆる松手入 門松 鳳文

長き夜のゆつたりシヨパン聴きにけり吉田 百代

秋蝶のものはや訪はざる庭となり 吉田 康雄

叢雨むらみにひと色となる花野かな 陌間みどり

大花野真青にせまる空一枚 小澤 純子

さながらに夕日のなみだ烏瓜 池田 忠山

◆こよろぎ (11・11) つとむ報

黄昏の紅葉の宿の木の手摺り 板谷 雅泉

一鍬のどつと田水の落ちゆけり 植松テル子

切ればすぐりんごの香り部屋に満つ 神山つとむ

◆青梅 (11・10) 幸子報

初氷厨の妻に声をかけ 大塚 行人

土の香の残る指先諸甘し 湯本とし子

山茶花や夜に入りてなほ散りやまぬ 神野美代子

買い足しに小銭鳴らして秋の暮 加藤まり子

うず高く白菜並ぶ直売所 久保寺トミ子

大鍋にほっこり煮ましょ冬立つ日 田渕 令子

晩秋のふるさと日和地酒さけうまし 田中 幸子

◆鷹 (11・6) 十五報

吊橋や落人村の柿たわわ 青木 孝子

噴く山のまた一つ増ゆ神の旅 西賀 久實

波止歩く猫の目光る十三夜 佐宗 欣二

草の実やズックの底の泥払ふ 須田 晴美

月昇る干潟の先の水平線 中田 笑子

夕日差す商家の中戸実南天 百川 秀子

照耀の月下に走る夜汽車かな 山崎美知子

バス停に新田の名や鴟日和 庄司 下載

鹿屠る儀式の如き刃の動き 瀬戸 りん

精霊棚片し六畳間に戻る 高橋久美子

蛇穴に入るやいぐねの針葉樹 中山智津子

献体に戻りし遺骨萩の雨 齊藤 桂

武甲山そびらに桑を括りけり 芹澤 常子

冬麗や耳ももいろに猫眠る 畠 梅乃

新松子雲低き日の海匂ふ 山口安規子

深秋や売地となりて五年経し 大木 敬子

画面より紙の地図派や翁の忌 大島美恵子

路地裏の釣瓶落しや三輪車 北崎 修

マフラーや調律中の駅ピアノ 田下 昌人

遮断機のゆるり上るや十三夜 中根 和子

海見えて四分停車青みかん 市川 好子

草紅葉休憩好みの茶碗かな 加藤 幾代

筆太の命名の文字秋澄めり 高橋 正子

穉田や大きく沈む五日月

守屋 まち

言葉にも知性が欲しい長き夜

風間 秀泰

I日に火の無き煮炊き秋夕焼

米山 翠

ゆつたりと無冠の暮らし萩の園

加藤 春江

亡き夫の法事終へるや星月夜

來田 新子

コスモスに足柄の風荒々し

坂入清四郎

山茶花やチャーシューメンの肉厚し

大沢 年子

芒野の深みの中に句碑眠る

瀬戸とみ子

小間切の女の時間ふとん干す

片野 秋子

菊日和人間模様駅に見る

高橋みどり

阿夫利嶺と富士を一望布団干す

小林 環

秋の薔薇年に二度目の美を競う

中津川晴江

無音なる演習場や枯すすき

近藤 絢子

風の道人の道あり野菊晴れ

中根登美子

冬林檎かじりて清し骨密度

下平 美子

石路咲いて庭隅の闇解きけり

中村 昌男

こてこての雪の富士山蒲団干す

杉崎 せつ

菊香る受賞の蔭に内助の功

廣田 悦子

蒲団干す朝の天気のがすがし

関根 琉子

菊の香や風を友とし青空へ

二上 光子

枯すすき人声のして人を見ず

鳥海 壮六

いつの日も別れはふいに黃落期

横塚 昌平

吉か凶か綿虫の畑うなひけり

古屋 徳男

三代のとぎれぬ会話関東煮

石井きよ子

薄枯れ規則正しき川の音

村場 十五

秋暁や山峡おこす一両車

石井千代子

◆たけのこ(11・10)

悦女報

◆実のり(11・18)

たか志報

輔輔祭り続けし夫は娘に

小宮 早苗

子供らに父が手渡す木の实独楽

岩本ひさみ

ひつそりと寺の入口冬桜

徳田 公子

木の实降るふる里の夜深々と

杉本 久子

上げ潮のきらめく水面秋の浜

三木 泰子

鶏小屋の屋根に棗の降る真昼

木村 幸枝

鶏頭の紅を極めて陽を仰ぐ

久津間百合子

山門のまた山門や木の实降る

新井たか志

冬うらら退役犬の薄目かな

宮崎 悦女

◆草むら(11・18)

重満報

◆おほる(11・10)

昌男報

寒空の扉開けたる内親王

石井 秀稀

人生の夢の途中の菊日和

小野 菊土

年に添う思いで数多風は秋

井上 和子

秋深しガウディ今も天を衝く

香川 花子

水鏡入り浸りなる秋茜

佃 悦夫

ボジョレヌーヴォーテレビ機敷の大相撲

佐々木重満

◆無所属

羽布団温し出来立てのメロンパン

小林永以子

はな丸をつけたき一ト日花野行く

一ノ瀬茂代

列島のV字回復初氷

北村 文江

煎餅焼く醤油の香文化の日

出澤 洋子

ビル三階の静かな日和赤トンボ

鈴木久美子

よく痩せてそろそろ彼岸花状態

大石 雄介

キヤタピラになつて登つた秋の山

大石 和子

さくできて遠くなりけり冬桜

蓑宮 わか

枯草や四百年の地蔵の眼

岩楯恵津子

行楽の皆にはぐれて猪に遇ひ

青木 勝子

語らざる女医の微笑み菊日和

木村美千代

知恵袋空っぽにして歳の暮

山口 千代

栗拾ひ汚す八十路の膝がしら

山田 照子

灯を入れて冬の始めの影となる

田畑ヒロ子

あふれだす愛は連綿彼岸花

穂坂志げる

曲がり角来て凧のどんづまり

小澤 園子

赤と黄と朱と赫なる笊の柿

須田 聡子

短日の文化人類学者かな

瀬戸 正洋

ビー玉のかち合ふ路地の鳳仙花

小島ノブヨシ

柿落葉ゆつくり動くオルゴール

岡田 典代

カブールは遠し秋明菊の白

杉山あけみ

城苑俳句・冬への部

(合同句集第十二集24〜38頁より近藤久江抄出)

冬老い坂急が登る押さないで

宇田川聖一

喜寿傘寿卒寿になごむ初句会

遠藤シヅ子

一筋の小径現はる枯野原

遠藤マツエ

残菊と冬河ドルフィンキックかな

大石 和子

ざぎと鳴る冬の太陽が飛んでる

大石 雄介

七三に分けし男の子や七五三

大木 敬子

冬山に鳶舞い杉の真青なり

大沢 年子

貸したまま戻らぬ本や雪明り

大島美恵子

小春日の箱根の山も衣裳替へ

大塚 行人

子等の声走りたくなる枯野かな

岡田 典代

煮凝りやたとえば零の句集かな

岡本 史郎

風花に旅情深まる山の駅

奥津ちわき

霜柱一人任地へ発ちにけり

奥津 能亭

あきるまで海を見てゐる神の留守

尾崎 一夫

鮫鱧の罪名不明吊るさるる

尾崎 竹詩

夫も子も帰りにてこそのおでん鍋

小澤 純子

人間もすり減るものよ十二月

小澤 園子

達磨市香具師手八丁口八丁

小野 菊土

散紅葉風と遊びて燃え尽きぬ

香川 花子

木枯らしに髪をなびかせ里歩き

風間 秀泰

河本 純子

(令和3年8月号)

大向日葵強き女の庭に咲く

菅野 英余

初めてこの句に出合った時、何か心の中にハッとするものを感じました。

私は今、九十一歳になる母と暮らしていますが、母の亡き後の不安を抱えています。そんな折この句を読んで胸うたれ、「そうだ 強い女になろう。雑草魂をもつて、うちの庭に大向日葵を咲かせよう。」亡き父と兄が必ずや私を守ってくれるだろう。仏壇に手を合わせ線香をあげました。

大木 敬子

(令和3年9月号)

朝顔のラッパが我に発破掛け

廣田 悦子

この夏は、私も毎日朝顔に元気をもらった。朝顔の種は俳句の友人から戴いた物。「花を楽しんで、いい句につながると嬉しいわ」と、発破を掛けられた様な気もした。

花の盛りは丁度、東京五輪、パラリンピックの頃。朝一番に花の数を数えるのが楽しみだった。各地区の五輪競技会場にも小学生の育てた朝顔が飾られ、選手たちへの応援、和みになった事が話題になった。ラッパ(花・音楽)は人の背中を押してくれるのだ。

風間 秀泰

(令和3年9月号)

稗抜くや明るき寡婦の怨み節

宮崎 悦女

足柄平野には多くの田んぼが有り、豊かな田園風景を見せています。秋になると稲穂が垂れ、より一層豊かさを感じます。

稲穂の出る前に稗を取るのが農家の大仕事です。やらねばならない稗取りを、前を向き元気に明るく農作業に勤しむ姿が想われます。それと裏腹に内に秘めた農婦の気持ち伝わってきます。この句は中七の「明るき寡婦」が生きる力を表現していると思います。

田渕 令子

(令和3年9月号)

宙を舞う美しき筋肉夏季五輪

佐々木重満

今年の夏季五輪は賛否両論のうちに終了した。開催されてからは、連日テレビに釘づけ。

「オリ」「パラ」の全競技の出場者、「ボランティア」裏方として支えた人々から感動をもらった。アスリート達の前進する姿、強き眼差、噴き出る汗、アスリート全員が「金メダル」にふさわしいと思った。自分の甘さ、弱さを恥じた。

「夏季五輪」の感動を有りがとうの佳句！

俳句おだわら鑑賞

第58回小田原梅まつり俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「梅」「寒晴」(いずれも傍題可) 各一句一組

未発表作品に限る

締切 令和三年十二月二四日(金) 必着

整理費 一組に付き千円(句稿に同封、何組でも可)

投句先 〒258・0019 足柄上郡大井町金子三〇三五―七

田畑ヒロ子 ☎〇九〇―四五四三―五〇三四

*作品は原稿どおり印刷します。

選者 協会役員及び各地有力作家(投句者に限る)

賞 県知事賞以下二十位まで 選者特選賞六人

第二部 俳句大会

日時 令和四年二月六日(日)

会場 小田原市民交流センター(UMECO)

受付 十二時 投句締切・十三時 開会・十三時

整理費 五百円(呈飲料)

席題 春季雑詠一句と席題当日発表一句 総互選

賞 市長賞以下五十位まで(結社賞含む) 参加賞

(主催) 小田原市観光協会 (主管) 小田原俳句協会

(後援) 各地俳句協会

*各グループは当日までに結社賞をご用意下さい。

*飲食可能ですがなるべく各自食事を済ませてご参加ください。マスク着用など感染症防止対策は継続します。

(城苑のつづき)

水浅く流るる十二月の川

寒すずめ仲間十羽を呼びよせて

冬野菜四角四面の角を切る

数へ日やひかうき雲の茜色

寒茜明日のあること疑わず

鎌倉の谷戸の明るむ干大根

杉千年日差す参道笹鳴けり

野良猫の定席決まる漱石忌

劳いの言葉やさしく冬の虹

お日さまが寝転んでいく干蒲団

片野 秋子

片野 節子

勝木 澄子

加藤 幾代

加藤かほる

加藤 健治

加藤 幸子

加藤 富江

加藤 春江

加藤まり子

理事会日程(各月第二木曜日)

1/13

2/10

◆お詫びして訂正します◆(十一月号)

1頁10句抄山田照子抄出の8句目作者名

(誤) 小島ノブヨキ

(正) 小島ノブヨシ

4頁1行目

(誤) 喜んでいるかもしれない。

(正) 喜んでいるかshれない。